

し、君の生き方に従つて帰隠できたと告げる。荷蓆翁あじがお 葵を背負つた老人。隠者をいう。【論語】微子に「子路従ひて後る。丈人の杖を以て蓆を荷ふに遇ふ」。棲すく やすむ。隠棲をいう。【詩型・押韻】五言古詩。上平十二齊（鶏・棲）・上平十四皆（懷・諸・乖）・上平十五灰（隈・迴・頬）・上平十六咍（哀・開）の通押。平水韻、上平八齊・上平九佳・上平十灰。
詩解 義熙十二年（四六）の作。最後の職である彭沢の令を辞して帰隠したのが、義熙元年のことで、もう足かけ十二年になる。すでに農耕生活に慣れて、春の耕作と植えつけ、夏の生育を経て秋の収穫を持つというサイクルが身についているようである。一年で最大の盛事である取り入れを前にして、隠棲生活を選んで継続してきた満足感にあふれている。寒々とした秋風が吹き荒れる中で、風のない静かな夜を思うとの表現は、存在するものをきつかけにして存在しないものをうたうという機知に富んでい

飲酒二十首并序（飲酒二十首並びに序）

余閑居寡歎、兼比夜已長。偶有_二名酒、無_二夕不_一飲。顧_一影獨盡、忽焉復醉。既醉之後、輒題_一數句_一自娛。紙墨遂多、辭無_二詮次_一。聊命_一故人_一書_一之、以爲_一歡笑爾。余閑居して歎び寡なく、兼ねて比_二る夜已に長し。偶たま名酒有り、夕べとして飲まさる無し。影を顧みて獨り盡くし、忽焉として復た醉ふ。既に醉ふの後、輒ち數句を題して自ら娯しむ。紙墨遂に多く、辭に詮次無し。聊か故人に命じて之を書せしめ、以て歡笑と爲さんのみ。

現代語訳 酒を飲んで 二十首 並びに序

わたしは世を避けて暮らしているので楽しみが少なく、加えて近ごろはもう夜が長くなつた。思いがけず名酒が手に入つ

て、毎晩飲まない日はない。影を連れにひとりぼっちで飲み干し、気がつくともう酔つている。酔つた後は決まって詩を数句作り、自らの楽しみとした。かくて書きつけた文句は多く、ことばに脈絡もない。まずは友に淨書してもらい、お笑いぐさとするだけ。

語注 0 飲酒 二十首からなる連作は、序によると、酒に酔つた時に書きつけたものをまとめたという。詩題の「飲酒」はその意味であつて、必ずしもすべてが酒をテーマにしているのではない。二十首中、酒にふれない詩もある。其の五と其の七の両首を「文選」は「雜詩」と題して収録していることからして、雜詩という方がふさわしいかも知れないが、「雜詩」と題する淵明の詩と異なるのは、本詩はあくまでも酔つたいきおいで書きつけた点である。何かをカムフラージュしている、換言すれば、本音に近いものを吐露している可能性性もある。制作時期は明らかでないが、彭沢県の県令を辞した義熙元年（四五）の翌年以降、十年余りの間に書きためたのではないだろうか。閑居 俗世を離れて隠棲する。比夜已長 秋になつたことをいう。「比」はこのごろ。顧影 振り返つて影を見る。自分以外に人のいないことをいう。独尽 一人で杯を空ける。輒題數句 酔つたらいつも詩の数句を書きつける。「輒」はその時はいつも。紙墨 書写材料。ここは書きつけた紙をいう。辭無詮次 詩の文句が思いつきを記したもので、推敲していない。「詮次」は計り考へて並べる。

其一（其の一）

- 1 衰榮無定在すいじやうむじんざい
- 衰榮定めて在る無し
- 2 彼此更共ひし之とも
- 彼此更ごも之を共にす
- 3 邵生瓜田中さうせい瓜田うだんの中なか
- 邵生瓜田の中
- 4 寧似東陵時なんぞとうりょうとき
- 寧ぞ東陵の時に似んや

語注 1 横櫻 忙しくせわしないさま。『論語』憲問に、孔子がうろうろとするのを「丘（孔子）何ぞ是の横櫻たる者を為すや」。3 裴回 あてもなく歩き回るさま。疊韻の語。『徘徊』に同じ。『史記』呂太后本紀に「呂産……殿門より入るを得ず、裴回往来す」。定止 休む場所。5 厥響 高く激しい音を出す。蘇武「詩四首」其の二に「糸竹 清声厲しく、慷慨して余哀有り」。清遠 高潔で深遠。『世說新語』言語に「会稽の賀生（賀循）、体識（人格と見識）は清遠にして、言行は礼を以てす』。

6 依依 恋い慕つさま。蘇武「詩四首」其の二に「胡馬 其の群れを失ひ、思心 常に依、依たり」。7 値 出くわす。8 紛 翼羽をすばめる。「歛」は「斂」と混用される。「翮」は羽の根元。淵明「山海經を読む」詩其の一に「衆鳥 託する有るを欣び、吾も亦た吾が廬を愛す」。違立 詞解 群れからはぐれた鳥が作者と二重写しになつてゐることはいうまでもない。鳥が身を託する所をやつとのことで見つけるが、それは一本の松である。松と柏は常緑樹であることから節操を変えないとえに用いられ、作者が節義を守りぬく姿勢であることを暗に示す。

其五（其の五）

- 1 結廬 在人境 廬を結んで人境に在り
2 而無車馬喧 而も車馬の喧しき無し
3 問君何能爾 君に問ふ何ぞ能く爾ると
4 心遠地自偏 心遠ければ地自ら偏なり

- 5 採菊東籬下 菊を探る東籬の下
6 悠然見南山 悠然として南山を見る
7 山氣日夕嘉 山氣 日夕に嘉く
8 飛鳥相與還 飛鳥 相ひ與に還る
9 此還有真意 此の還るに真意有り
10 欲辯已忘言 辯ぜんと欲して已に言を忘る

現代語訳 その五

人里に居を構えているが、車馬のやかましさはない。
君に問う、どうしてそんなことができるのかと。心が離れていれば場所も邊鄙になるもの。
東のまがきのそばで菊を摘み取り、ゆつたりと南山を見る。
山のけはいは夕暮れがよい。鳥が連れ立つて帰つてゆく。

この帰還にこそ眞の意味がある。ことばで説き明かそうとすることはを忘れてしまつた。

語注 1 結廬 家を組み立てる。「廬」は粗末な家。人境 人の居住する地域。2 車馬喧 貴顯の者が頻繁に訪問することをがない状態を指す。心遠 心持ちが俗世から遠く離れている。6 悠然 はるかなさま。対象との間に距離があり、それが精神的な距離、ゆとりともつながる。見南山 南山がふと目に入る。「南山」は廬山を指す。北宋・蘇軾が「東坡題跋」で世のテキストは「見」を「望」を作るが、こゝは何気なく見えたのであり、見ようとして望んだのではないと言つたのは有名。底本は「見」で、別本に「望」を作る注記する。ただし「文選」「芸文類聚」では「望」を作る。7 山氣 山中の雲氣、もや。淵明

紀に「平王、立ち、東のかたの雑邑に遷り、戎寇を辟（避）く。底本は「平生」に作るが湯漢本により改めた。峡中、郊（河南省洛陽市の近く、周の成王が一時都を置いた）のあたり。峠」は「郊」に通じる。遺薰、北方異民族の末裔。晋を南方へ追いやつた鮮卑族を指す。「獮鬻」は夏の時代の北方異民族で、漢代には匈奴と呼ばれた。「薰」は「獮」に通じる。「遺」は後裔。

21・22 刘裕が北伐を遂げて、禅讓の準備を整えたことをいう。双陵、二つの丘陵。険阻な地である崤山（河南省洛寧県の西）には東西二つの小山がある。その東西に位置する洛陽と長安の民衆が養い導かれたとは、劉裕が北伐で平定したことをいう。

甫 初めて。三趾、三本足の鳥をいう。瑞兆の一。『宋書』符瑞志下に「三足の鳥は、王者 天地に慈孝あれば則ち至る」。奇文、世にもめずらしい文。九錫文や禅讓の詔をいう。23・24 王子晉が仙去したことで晋王朝の滅亡をたどえる。ここから最後までは神仙に託して、東晋滅亡に対する無力感をにじませる。王子、仙人の王子晉を指す。王子喬ともいう。伊水・洛水のあたりから登仙し、三十余年後に鶴に乗つて死んだ。数日後にまた去つたという。『列仙伝』に「王子喬なる者は、周の靈王の太子晉なり。好く笙を吹き鳳凰の鳴を作す」。清吹、笙を吹いて鳳凰の鳴き声を出したことをいう。河汾、黄河と汾水。汾水はもとの晋の国を流れることから、晋王朝が亡ぶことを暗にいうか。25・26 陶淵明が世を避けて閑居し、長生につとめることをいう。朱公、春秋時代越國の大夫、范蠡を指す。陶朱公と号した。「陶」を借りて陶淵明自身を指す。范蠡は越王勾践を輔佐して吳との戦いに勝利したが、その後は身を退き、転居する先々で名をのこした。練九齒、永遠の年齢を得べく長生の術を修練する。「九」は「久」に通じ、「齒」は「齡」の意である。27 峨峨、高く險しいさま。西嶺、西方の山、崑崙山を指す。前の句で長生の術を身につけるとうのを受けて、仙界に言及する。28 儂息、武器をしまい民を休ませる。帰隱をいう。29・30 天のかたちは永久不変のものであつて、彭祖のごとき長命な人と短命な人との比較するレベルを超えて天容の通押。平水韻、上平十一真・上平十二文。

詩解 詩全体が韜晦した表現で一貫している。作者の言わんとするところは判然としないが、東晋王室の滅亡を悼み悲しむ点で、諸家の注はほぼ一致している。「飲酒」「止酒」「述酒」と酒を題にする詩が三種類続き、それぞれ詠懷、諧謔、自己韜晦という五言古詩。上平十七真（晨・身・親）・上平十八諄（馴・倫）・上平二十文（聞・分・雲・墳・君・薰・文・汾・紛）・上平二十一欣（勤）の通押。平水韻、上平十一真・上平十二文。

特色を有している。

責_レ子一首（子を責む一首）

- 1 白髮被_ニ兩鬢_一 白髮、兩鬢を被ひ
- 2 肌膚不_ニ復實_一 肌膚、復た實ならず
- 3 雖_レ有_ニ五男兒_一 五男兒、有りと雖も
- 4 總不_レ好_ニ紙筆_一 總べて紙筆を好まず
- 5 阿舒已二八 阿舒は已に二八なるに
- 6 懶惰故無_レ匹_一 懶惰なること故より匹無し
- 7 阿宣行志學_一 阿宣は行くゆく志學なるも
- 8 而不_レ愛_ニ文術_一 而も文術を愛さず
- 9 雍端年十三 雍と端は年十三にして
- 10 不_レ識_ニ六與_ニ七 六と七とを識らず
- 11 通子垂_ニ九齡_一 通子は九齡に垂んとするに
- 12 但覓_ニ梨與_ニ栗_一 但だ梨と栗とを覗むるのみ